

昭和二十三年十月二十九日、舞鶴に上陸した。思えば長く苦しい日々であったが、生きて帰れるとは誠に運が良かったと思っている。

異国の地で無念にも命を落とした方々の御冥福をお祈り致します。

【執筆者の紹介】

昭和十九年五月

満州第五七師団工兵第五

七連隊に応召

昭和二十年七月一日

チチハル丁兵幹部教育隊

入隊

八月十五日

終戦（ハルビンにて武装

解除）

十一月

ウオロシロフ郊外に到着

昭和二十三年十月二十九日

引揚船遠州丸にて舞鶴港

入港

十一月六日

復員

平成五年三月に退職してからは、地域住民の親睦発展のため精力的にボランティア活動に従事し、現在に

至る。

その他、戦友会の幹事に参画、多忙な日々を送っておられる。

（埼玉県 饗庭 秀男）

平和国家日本の礎とエピソード

東京都 井上 勇

あの昭和激動の時代といわれた昭和二十年八月十五日までの間、現在の中国を相手とした戦争から太平洋戦争の十五年にも及ぶ戦争が、無条件降伏という悲惨な結果で終わりを告げたとき、国民はほろ然とたたずみながらも平和国家日本の姿を脳裏に描き、荒廃した祖国の復興に立ち上がり汗を流したのであった。この国民の悲願がかない、「永久に戦争を放棄する」という平和憲法が公布され、この平和憲法に培われて今の日本の姿がある。この間平和と繁栄が続き、国は富み、人々は華美を競いつつ、日々の生活を心ゆくまで

エンジョイしている。戦争を知らぬ戦後生まれの人が全人口の七割を占め、残り三割の中にいる私は、直接戦争に参加を強いられたあげく、シベリア抑留という極限を経て生還した、言わば昭和激動時代の生き証人である。

その私が生き証人の務めだと自らに言い聞かせ、平和国家日本の礎といったエピソードをあえて記述し、礎の風化に歯止めをかけるとともに平成以後の時代も語り継がれることを切願している。

「朕深く世界の大勢と帝国の現状とにかんがみ、非常の措置をもって時局を收拾せんと欲し、ここに忠良なる爾臣民に告ぐ 朕は帝国政府をして米英支蘇四国に対し、その共同宣言を受諾する旨通告せしめたり」私はこの玉音放送を千島列島のウルフ島に駐屯していて傍受した。「これで長かった戦争がやっと終わり、内地に戻って故郷に帰れるぞ！」と戦友と肩を組んだが、この島に船と名のつくものがなく、内地から迎えに来て帰るといふことも許されず、全くの虚無の

日々だった九月の初旬、突如として進攻してきたソ連軍に拘束され、シベリアに連行されて抑留されたのである。

初めて体験した敗戦の惨めさと魔境の大地シベリアでの虜囚生活。これをいま改めて語るにはあまりにも疎ましい。でき得ることなら一切を忘却の彼方に葬り去りたいと思うが、抑留二年間の道のりで強いられた苦しみと悲しみ、そして屈辱感は脳裏に深く刻み込まれ、生還以来四十八年という長い歳月が経過した今もなお折に触れて胸中を去来し、心魂を激しく揺さぶるのである。今これを回顧するとき戦争ほど愚かなものはないと思うと同時に、かつて自分が歩いた虚無と屈辱の道のりは、何人たりとも踏ませてはならないし、ましてわが子、わが孫には、である。二十歳代という人生においてもっとも夢多く花ひらく時代を大義名分のない戦争に駆りだされ青春を蹂躪された我々の怨念を子や孫に伝えようとしても、戦争そのものが過去視され、世が華美を競う飽食の時代とあっては、生き残り老人の戯言くらいにしか受け止めてもらえない。し

かし、戦争の愚挙から敗戦の空虚を通し苛酷な状況の中を生き抜き、自由と平和の尊さを身をもって体得し、不戦の誓いを心の奥深くに刻み込んだのも我々年代の特質と言えるのである。その私がいまシベリア抑留時代を回顧し、一編のエピソードを記述してみたいと思う次第である。

私はシベリアに抑留されていた一時期、ラーゲリのスタープ（事務所）の当番を命じられ、収容所長であつたボンボヴィット上級中尉と深いかわり合いを持った。完成したら必ず日本に帰国させるという条件で従事したカーミン作業（凍土の小さな丘をダイナマイトで爆破して崩し平地にする作業）のため、一緒に作業した仲間が疲労と飢餓のため複数人が亡くなり凍土の下に逝つた経緯がある。

私はこの作業に連絡員を兼ねて従事したが、疲労のためオーカ（病人）となり、昭和二十二年十月十六日復員船遠州丸で舞鶴に上陸して祖国の土を踏んだ経緯もある。私はこの舞鶴で米軍のCIC（思想調査部）

の取り調べを受けたが、そのときの日本人通訳が私を殊更にソ連共産党に洗脳された者だ！と決めつけようとした態度が今でも脳裏にあるので記述してみたい。

呼ばれて狭い個室に入ると米軍将校と日本人通訳の二人がいた。通訳に促されて椅子に腰をおろし、机上を見ると「井上勇」と英字で書かれた分厚い書類がある。事前に何らかの方法で私のことを調査したのであるが、どうして私が調べられるのかといふかつていたら、日本人通訳が「職務のために言葉を改める」と前置きして、「井上勇はフルムリのラーゲリでウダルヤナグループ（青年行動隊）を結成し、自分は連絡員としてカーミン作業をしたことを認めますね」とのたまう。私は「どうしてあのカーミン作業のことが？」とつぶやくと、「このグループで作業をした仲間が既に複数人帰国し、この人達の供述で君のことが判明したのだ」と言う。「その人の名は？」と問うと「それは答えられない」とのたまう。

私はこのときボンボヴィットが言った「カーミン作業が終わったら帰国させる」の言葉を思い出してい

た。恐らく作業中に倒れて病院に移送された仲間のうち幾人かが私より先に帰国したことを知り、心休まると同時に、やはりボンボヴィットは信義を重んずるソ連人だったのだとホッとしていた。カーミン作業を認めた私に通訳は、ウダルヤナグループを結成した経緯と連絡員になった理由を問うてきた。私は「グループの結成は収容所長のボンボヴィットが、カーミン作業が終わったら必ず帰国させるという好餌で若い仲間七十人を集め、すべてのお膳立てが終わったところに私を連行し、『ヨノエ（井上）は連絡員をしながらこの作業をやれ』と命じられたのであり、私自身はウダルヤナグループの結成には全く関与していない。連絡係になった理由は、他の人達より早くロシア語を覚えたのでソ連人の作業係と連絡し合う上で、スムーズに作業が進行すると思ったボンボヴィットが命じたのでしよう。私自身もカーミン作業のためこんな体（一六八センチの身長なのに体重が三七キロしかなかった）で帰国させてもらったが、私より先に帰国した仲間がどんなことを言ったのかは知らないが、CICから取

り調べられるようなことは何もしてはいない！」と聞き直った。

通訳は、「君とボンボヴィットの関係について、先に帰国した仲間の一人が、井上とボンボヴィットはなにか特別の関係にあるみたいと言っていたが、いったいどういう関係なのか」と問う。「ボンボヴィットは私が収容されたゴーリンの六二八収容所の所長で、ソ連軍の上級中尉だ。私はこのラーゲリでスタープ（事務所）の当番をしていたが、フルムリのラーゲリで七十人のウダルヤナグループが結成されたとき、私はフルムリのラーゲリに行き、ウダルヤナグループの連絡係をしながらカーミン作業をしてくれと命じられた。ただ、八カ月間当番をして常時彼と行動を共にしていたので互いに気心が通じ、言いたいことを言い合ったが、彼はソ連人にしては珍しく信義に厚く約束を守る人であり、先に帰国した仲間や私が帰国できたのもボンボヴィットのおかげだと感謝している。ただそれだけのことで、特別視される関係は何もない」と突っぱねた。通訳は、私がボンボヴィットを信義に厚

いソ連人だと言ったことから更に執拗な質問をしき
た。「信義に厚いボンボヴィットという一人のソ連人
に、一人の日本人虜囚でしかなかった井上個人が感謝
の気持ちを表現しただけで、ほかに何らの感慨も他意
もない」と私は反発した。

通訳と私の問答を黙って聞いていた米軍将校が「ソ
連共産党についてどう思っているのか、率直に言っ
てくれ!」とのたまう。私はうかつにも「ヤー ニズナ
イ(私は知らない)」とロシア語で言ってしまった。
この将校、一瞬顔を硬直させ、私をキーっとにらん
だ。「大変失礼致しました。ナホトカの帰国者専用
ラゲリでお寒いオルグの洗脳者に、いつも貴方と同
じような質問をされたとき私は『ヤー ニズナイ』を
連発していたので、ついこの言葉が出てしまったが、
いいですか、お二人とも耳の穴をかつぽじってよく聞
いてくださいよ! 戦争に敗れたためソ連に連行さ
れ、シベリアで虜囚として強制された労働を無報酬で
やってきたが、日本人としての心と体はソ連に売って
はいない。従ってソ連共産党には興味が無いし全く関

心はありません。私は国際捕虜取扱規則を全く無視し
たソ連の行動に憤激しており、帰郷して落ち着いたら
生き証人としてソ連の条約破棄、規則無視を鋭く追及
するつもりでいるくらいで、日本人虜囚として二年間
抑留されたが、私の体のどこを切っても日本人の血が
流れるから、あなた試しに切ってみてはいかがです
か!」と再度開き直った。延々二時間近い思想調査に
私は頭にきていた。今度何か言ったらロシア語で「エ
ビヨマーチ!(ロシア語最悪の侮蔑語)」と罵倒して
やろうと思っていた。

しばらくして米軍将校は通訳に調査終了を告げ、私
に「サンキュー」と言いつつラッキーストライク三個
を差し出し去っていった。私は日本人通訳に「あなた
は私をソ連共産党に洗脳された者だと決めつけようと
したが、拘留された私を含む日本人の全部はダモイ
(帰国)という言葉には弱く、帰国させるからと条件
をつけられたら誰だってどんなことでもやってきたん
だ。この事実をあなたのその固い頭に入れておいてく
ださい!」と言い捨てて引揚寮に戻った。

仲間は「長時間絞られたようだな」と言っていたが、この仲間に「三個貰ったから一個やるよ」と煙草をやったら、わきにいた一人が「おれも調べられたが煙草はくれなかったぞ。なんであんなだけが！」とうるさい。「その真意は米軍将校に聞け！」と、私は腹を立てていた。理由は日本人通訳の態度にあった。進駐軍の通訳と、やっとの思いで帰国した私と、立場は各々異なるが日本人同士であることには変わりがないのに、その私を殊更にソ連共産党に洗脳された者だと決めつけようとして、米軍将校の質問以外に個人的感情を含めた余計な質問となり、長時間の調査になってしまった。ナホトカでは無節操でお寒いオルグが抑留貴族だと胸を張り、ここ舞鶴では進駐軍の通訳がさながら特権階級のごとく振る舞っていた。私はこの二者を見たとき敗戦が生んだ無知蒙昧な輩に無性に腹が立ったのである。

このような舞鶴での不快感を胸に秘めて帰郷した私は、体の回復を待って昭和二十三年四月農林省栃木食糧事務所に入所し、政府米買入業務に従事していた

が、松川事件はか一連の事件で昭和二十五年のレッドパージ云々に嫌気を感じ、二十七年三月末、妻子を連れて上京し、東京都江東区役所のN氏に救われた。このときN氏が言った言葉を記述してみたい。

「望郷の想いに駆られ帰国を望むシベリア抑留者の日本人に、完成したら帰国させるという好餌で釣ったボンボヴィットもしたたかだが、約束を守って帰国させたのだから問題はない。ただ病気になるって亡くなった方々は気の毒だが、天の配剤と割り切るほかはない。それを收容所長と当番であったあんたとの関係を殊更に曲解し、洗脳者だと決めつけようとしたCICと日本人通訳に憤りを覚えます。私はこんなことには無関係に、シベリア抑留という極限に耐えて生還したあんたの強靱な精神力を高く評価して採用しますのです、思う存分才能を発揮し地方自治のために働いてください」と。

以来、昭和六十年三月末、嘱託を含む三十三年間の役所生活を終え、現在、妻と二人の静かな年金生活の中に居る。

昭和二十二年九月末、ボンボヴィットが病院での別れのときに言った言葉を記述してみたい。

「ヨノエ（彼は私のことをこう呼んでいた）、おまえはあのウダルヤナグループの中で、連絡係をしながらカーミン作業に従事してくれてありがとう。残っていた部分はゲルマンスキー（ドイツ人）にやらせ期日までに完成したよ。しかしこの作業のためみんなをオーカ（病人）にしてしまつてごめんね。ヨノエのことを医師に聞いたら、内部疾患はなく、単なる栄養障害からきた体重減と言っていた。でもこの冬を越させると危険だと言っていたが、越冬させるつもりはなく約束どおり帰国させるから、ここにいる四人と一緒にヤボンに帰ってくれ。入院治療している十八人については、私が責任もつていずれ帰国させるから安心するよ。うに。ただ一言言っておくが、カーミン作業中に倒れ病院に収容された仲間のうち複数人が亡くなったが、このことも含め、カーミン作業のことは今の時点で全部忘れて欲しい。このことはあくまでもソ連側スタッフと日本人虜囚との間のことであり、ヨノエには全く

関係のないことだ。シベリアの二年間でいやな想いをしたと思うが、今の時点で全部忘れることだ。ソ連という国は多民族国家なので種々雑多な人がいる。これらの人々は私らとは異なりいやなことをしただろうが、すべてのことを全部ここに捨てて肉親が待つ祖国ヤボンに帰ってくれ。私はヨノエという真面目でコツコツやり屋の日本人が居たことを忘れないよ。では、ダスビダニア！（さよなら）」と言つて去つて行つた。

私はこのあと慟哭していた。それはソ連軍の上級中尉という肩書を持ったラーゲリの所長が、ただ一介の日本人虜囚でしかない私に切々と語り、信義を貫こうとしている真摯な姿に泣かされたのである。この人との出会いはスタッフの当番になつてからのことであり、私はこまめに彼の世話をやいたが、彼もまた何くれとなく面倒を見てくれた。互いに信頼し合ったソ連人将校と一人の日本人虜囚の出会ひであつたが、そこには国境を超え人種を超えた人間愛が芽生えていたのであろう。

今どうしていることや。私より十歳くらい年上の

人であったが、もし生きていたら是が非でも再会したいと思う唯一のソ連人である。

シベリア抑留見聞記

神奈川県 香坂 毅

昭和二十年九月二十八日早朝、マンドリン小銃を肩から掛けたソ連カンボーイの引率で、南満州補給廠文官屯九二八部隊を出発する。高粱畑と真桑瓜畑に挟まれた農道をしばし行くと、集落と思われる樹々の密集したその中に学校風造りの建物があり、校庭のような大広場には既に他の部隊から大勢の日本兵が屯していた。ここが我々を連行すべき応急用の集結地、北陵収容所だった。

程なくして、恰幅のよいソ連将校が通訳を伴い中央に設けられた壇上に上り、今後の輸送計画について説明があった。

「あなた達はもうすぐ日本に帰れます。満州よりウ

ラジオストクを経て船で日本に行きます」。騒然としていた広場も、ソ連将校の漠然とした説明であったが、いずれにしても日本に帰れるのだという内容に不安で動揺していた気持ちから冷静さを取り戻す。出発の号令を合図に、満人らしき案内人を先頭に隊列の前方から静かな足取りで動き始める。

変哲もない道幅の狭い殺風景な農道を、十九歳で満州の地に赴き、清原での家族との別れ、入隊後初めて外出した時の肥溜め騒動、日本への逃亡の事など様々な出来事を思い浮かべ、足元を見つめながら黙々と歩き続けた。どの位の時間が過ぎたのだろうか、やっと有蓋貨車が停車している駅構外と思われる所に着く。満人の苦力が日なたぼっこしながら雑談していた。古年兵の一人がここは何という所か尋ねると、面倒くさそうに皇姑屯だと教えてくれた。我々を遠きシベリアの大地に輸送するための、まさに始発駅だったのだ。ソ連側よりの伝達はすべて、我々の逃亡、暴動を恐れてか、ヤボンスキー・サルダート（日本兵）東京ダモイと偽り続け、その実は、当初より我々を軍事捕虜とし